

ニッポン珍供養

鵜飼秀徳

Ukai Hidenori

はじめに

幼い頃、飼育していたカブトムシや金魚を死なせてしまった経験が、あるのではないだろうか。その時あなたは、小動物の亡骸なきがらをどうしたか。ティッシュに包んで、生ゴミと一緒に捨てただろうか？ 躊躇ちゆうちゆうなくトイレに流したか？ 心優しいあなたはきっと、庭先や公園の片隅に埋め、墓標の代わりに小石を置いて、手を合わせたに違いない。

いのちあるすべてを弔う——。日本人は、不思議な葬送行動をとってきた民族だ。有史以来、ありとあらゆるものを供養してきた。『涅槃経ねはんぎょう』はこう説いている。「草木国土悉そうちくこつしつ皆成仏」。人間や動物だけではなく、草木や土壌ですら、みな悉く、仏になる要素を持ち合わせているという意味だ。だから、人間と同じように供養するのである。

供養の対象物は、無限に広がっている。よく知られたところだと、人形供養や針供養、筆供養など「モノ」の供養が伝統的に続けられている。人びとが愛着を持って大切に使っ

てきた道具に対する感謝のところが、「供養する」という行為に昇華されたものであろう。だが、それだけにとどまらない。モノの供養は、メガネ、財布、パソコン、スマホ、パソコン、車、入れ歯、郵便物……果てしなく広がる。

道路や橋、太陽、月の供養なんでものも存在する。「道路の供養」には首を傾げてしまうが具体的には、鎌倉街道や道玄坂の墓などが存在する。道路を供養する目的は、どこにあるのか。

さらに、天体である太陽や月がどうして弔いの対象になるというのだろうか。不可解極まりない。本書では、その謎を解き明かす。

生き物の弔いも、枚挙に遑がない。さまざまな動物、昆虫、爬虫類・両生類、魚類などの供養は中世の時代から続いている。その痕跡は「石碑」や「塚」として各地に残されている。

たとえば理系大学のキャンパスには、必ず動物の供養塔を見つけることができる。大学ではハムスターなどの小動物や昆虫を実験や解剖実習に使用し、最終的には犠牲になっていただくわけだから、きちんと弔わなければならぬというわけだ。他方で、ヨーロッパやアメリカの大学で実験動物に関するモニュメントの設置や、供養の実例はあまり聞いた

ことがない。

動物園や水族館などにも供養塔は存在する。もつと言えば生き物を扱う空間、つまり畜産関係、魚市場、釣り堀、動物管理センター、競馬場などには慰霊の場があり、年に一度は供養祭が実施される。生き物関連施設の敷地をくまなく探してみてほしい。きっと慰霊碑を見つけることができるはずだ。

昆虫の供養の世界は実にデイープである。昆虫の墓は、虫塚と呼ばれている。虫塚には、昆虫すべてをひつくるめて成仏を願うものと、個体や種ごとに弔うものがある。後者でいえばバッタ、カイコ、セミ、ハチ、チョウ、トンボなどさまざまである。

北海道には、明治時代につくられた「バッタ塚」が残されている。そこには、北海道開拓における人間と、バッタとの戦いの証あかしをみることができる。害虫の供養は、ハエ、カ、シロアリ、ゴキブリにまで広がっている。われわれは憎き害虫を駆除する一方で、害虫を慰霊し続けるという、矛盾に満ちた行為を続けている。

さらに、弔いの対象を広げいくと植物の世界にもおよぶ。植物の墓は「草木塔」と呼ばれる。山形県米沢地方よざわが源流で、草木塔は今でもつくられ続けている。東京都内でも、草木塔を見つけることができる。類似のものでは、海藻や細菌の墓もある。

日本人の、生きとし生けるものへの慈悲深さは、昨今のペット葬やペット霊園の拡大にもみて取れる。ペットを亡くした遺族は、ペットコミュニティを巻き込んで、盛大な葬儀を営む。ペットの墓への供物には、ペットフードのほか、「尾頭付きの鯛」「ステーキ」などが並ぶという。供花も、色鮮やかな花が多い。

他方で、人間の弔いはどうか。身内のみで営む「家族葬」がすっかり主流になり、葬儀をしない火葬のみの「直葬」を選ぶ遺族も少なくなない。「墓じまい」も、加熱している。この逆転現象はいつたい、なぜなのか。本書は、人間以外の弔いにスポットを当てることで、人間の葬送が希薄化している理由を浮き上がらせる。

珍奇なる供養の世界は果てしなく広がっている。そこには、私たち人間と対象物とのストーリーが秘められている。さて、ページをめくって深淵なる珍供養の世界を覗いてみてほしい。

目次

はじめに

3

第一章 奇妙なモノ供養

さまざま墓石／墓石の墓場へ／墓石の末路／迷子郵便供養塔／見えざる思いを受け入れる寺／スマホを供養する／“情報”も用う／人形供養祭／人間の葬式以上に重い雰囲気／歴史の古い人形供養／冥界結婚と夫婦人形／AIBOの葬式／ドナーとなるロボット／人間とロボットの新しい関係／人間とロボットの境界があいまいに／日食を供養する!？／太陽が犠牲になってくれる／月待供養塔／道路を供養する／頼朝と橋供養／なぜか埼玉に多い橋供養塔／愛馬から愛車へ／廃車へ感謝を伝える

- 供養塔が集結する聖地

11

第二章 動物を供養する

飛鳥時代の犬塚／忠犬ハチ公のド派手葬／死後は剝製・標本に／南極犬タロとジロ

73

第三章

魚を供養する

「推定死亡」で慰霊される／剝製となり再会したタロとジロ／牛の鼻輪を積んだ「鼻ぐり塚」／豚骨ラーメンとフライドチキン／護国寺の象供養／動物供養のはじまり——回向院／猫も犬もオットセイも／日本人の供養心の受け皿／ペット供養の元祖／動物供養をめぐる法廷闘争／実験動物を慰霊する／「赤い眼の色を抱く」——シロネズミの碑

金子みすゞ「鯨法会」／太地町のクジラ供養祭／生きるための殺生とは／浜名湖に立つ巨大うなぎ観音／放生会ではウナギ五〇〇匹を放流／上野不忍池のフグ供養塔／本堂に安置された「マグロの位牌」／ムラの窮地を救い続けたマグロ／第五福竜丸の被爆マグロ塚

・各地の魚介類の供養塔・供養祭

第四章

昆虫を供養する

日本独特の文化「虫塚」／上野寛永寺の「蟲塚」／啓蟄に開催される供養祭／隈研吾設計の養老孟司「虫塚」／八王子にある日本最古の虫塚／ウンカ大発生で大飢饉に／幻想的な夜の行事「虫送り」／復活した小豆島中山の「虫送り」／開拓者VS.バッタ／日光を遮る

ほどのバッタが襲来／北海道のバッタ塚／人類史Ⅱバッタとの闘い／発生し続ける蝗害／殺虫剤メーカー「いっばい殺して、ごめん」／害虫だって供養する／一寸の虫にも五分の魂／「しろあり やすらかにねむれ」／護鬼佛理天像／ゴキブリ供養祭へ／伝説から生まれたムカデ供養／京都「蚕ノ社」／蚕の霊は「国葬」に／猫は蚕の守り神／蜜蜂をたたえる顕彰碑／立石寺にあるせみ塚／昆虫の葬式／カエル寺

- 各地の虫塚／各地の虫送り

第五章

草木の供養

草木国土悉皆成仏／山形発祥の草木塔／東京の寺で行う草木供養／サボテンは人間の声を聴く／日本人と海藻／微生物の吊い——目に見えざる生命

おわりに

参考資料

*本書は『ペットと葬式 日本人の供養心をさぐる』（朝日新書、二〇一八）を大幅に加筆修正したものです。

写真 鵜飼秀徳

第一章 奇妙なモノ供養

さまざま墓石

「墓じまい」や「寺院消滅」が進む中、墓石の処分問題が浮上している。墓石の多くは産業廃棄物として粉砕処理され、土木工事などで再利用される。

しかし、近年、しばしば墓石の不法投棄によって、業者が検挙される事案が発生している。

二〇一九（令和元）年、福岡県北九州市きたきゅうしゅうの土木会社の経営者が産業廃棄物処理法違反（不法投棄）で逮捕された。経営者は同市の霊園で墓じまいが生じた際の墓石の処理を委託されていた。墓石五三基（約五トン）分の処分費を浮かせるために、土中に埋めたい。また、二〇一八（平成三〇）年には宮城県岩沼市いわぬまの解体業者が、墓石約一一トンを投棄した疑いで逮捕されている。

不法投棄ではないものの、住民を不安に陥れた事例がある。二〇一八年、福岡県福岡市西区いまづの今津干潟で三〇基ほどの古い墓石が無造作に転がっているのを、住民が発見して通報。潮が引くと、戒名や没年が刻まれた墓石がいくつもむき出しになるような状態だった。調査の結果、別の地域の寺院に置かれていた墓であることが判明した。寺に納骨堂ができただけで、大量に残ってしまった墓が再利用され、護岸の基礎に使われたという。

原型をとどめる状態で土木資材に使われれば、地域の人は心理的にあまりいい気分にはならないだろう。

墓じまいの急増に伴い、墓石が彷徨^{さまよ}います——。そんな、シャレにもならない事態が現実になっていくのだ。

厚生労働省「衛生行政報告例」によると、最新の調査である二〇二三（令和五）年度の改葬（事実上の墓じまい）の数は全国で一六万六八八六件。二〇〇八（平成二〇）年度では七万二四八三件だった。一五年前の水準の倍以上になっている。同時に、撤去された墓石の行き場が問題になっていくというわけだ。

ここで「墓じまい」の流れを説明しよう。まず、菩提寺^{ぼだいじ}の住職が「性根（魂）抜き」の儀式をする必要がある。性根抜きを実施しないと、心理的な抵抗感が生まれ、石材業者が撤去を拒否することがある。儀式を済ませた上で、遺骨や土葬遺体を取り出す。東京や東日本の多くの地域では、骨壺^{こつぼ}ごとカロート（納骨室）に納骨していることが多く、そのまま取り出せばよいので簡単だ。

だが、関西地方などでは遺骨を骨壺からざらっと出して、納骨することが多い。したがって、遺骨が「土」に還^{かえ}っていることもある。遺骨が残っていない場合には、「一握の土」

を遺骨替わりにする。

厄介なのは、土葬墓である。地方都市や離島などでは、土葬墓が現存していることがある。長方形の広めの区画で、古い墓石が傾いているようなケースは土葬墓である可能性がある。

この場合は重機で三メートルほど掘り返し、遺骨が残っていれば回収する。比較的、遺体が残りにやすいアルカリ性の土壌だと、頭蓋骨に髪の毛が残っていたり、遺体が屍蠟化していたりすることも。土葬遺体は、改めて火葬することになる。遺骨が残っていない場合は、やはり、墓地区画の土を「遺骨」に代えて、一握り取る。

遺骨を取り出した後に、墓石を撤去する。墓碑銘が書かれた竿石さおいしや霊標れいひょう、竿石を支える台石、カロート、区画を囲んでいる巻石、卒塔婆そとば立てなどを取り外し、更地に戻す。

通常、撤去された石は石材業者が、産廃業者へと渡す。多くは砕いて、アスファルトの地下や建設資材として再利用される。かつては鉄道の敷石にされたケースもあった。ご先祖様の魂が眠っていた墓が、道路や鉄道などのインフラに転用されているとは。ご先祖様も遺族も、知る由もない事実だろう。

だが、「粉碎されるのは忍びない」として、墓石を引き取って供養する寺院があるとい

う。現地を取材した。

墓石の墓場へ

広島県福山市街地から山道を車で走らせること四〇分。カーブを曲がると大量の墓石でできた「山」が、視界に飛び込んできた。ここが関西や中国地方一円から運び込まれてくる、墓石の安置所である。

一万平方メートルもの広大な敷地に八万基以上も置かれているという。墓石は縦に隙間なく、ギッシリと積まれている。上部から眺めれば、モザイクアートのようにも見えるところどころ、大きなオベリスク型の墓が突き立っているが、これは近代における戦争で英霊となった軍人の墓である。

「天保（一八三〇～四四年）」「安政（一八五四～六〇年）」といった江戸時代の墓から、十字架がついたキリスト教式の墓、石仏、巨大な合祀型永代供養墓など、ありとあらゆる墓石が眠っている。高級石材の庵治石の墓は新規で建立しようものならベンツ一台分くらいはする代物だが、ここにはゴロゴロとある。いわば「墓石の墓場」である。もっと概念を広げれば「石の供養」、にもなるかもしれない。



不動院の「墓石の墓場」

驚くことに「令和六年一月三十日寂」と彫られた霊標もあった。取材のわずか一年前に納骨された墓が、早くも墓じまいされているのだ。どういう事情があったのかは分からないが、気分が重くなった。

この墓石安置所をつくったのが、福山市内にある天台寺門宗の不動院^{ふどういん}である。知り合いから「墓石を置く場所がない」との相談を受けた住職の三島覚道^{さくみち}さんが、二〇〇一（平成一三）年から墓石の受け入れを始めた。「人を祀^{まつ}っていた墓石が機械で割られていくのが忍びない。宗教を問わず、うちで引き取って供養したい」（三島さん）

不動院^{ふどういん}が受け入れを始めると、瞬く間に噂^{うわさ}が広がり、遠くは東北からも業者が墓石

ニッポン珍供養

鵜飼秀徳

発行：集英社インターナショナル（発売：集英社）

定価：1,012円（10%税込）

発売日：2025年6月6日

ISBN：978-4-7976-8157-4

ネット書店でのご予約・ご注文は [こちらからどうぞ！](#)